

武蔵野の富士

春

武蔵野の春である。

房総の深山清澄寺に数年とじこもった蓮長法師にとつては、これはまことに目あたらしい風景であつた。そこには亭々とそびえる老杉もなく巨樟もない、茫々たる草原のみである。六尺豊かな体軀をもつ青年僧蓮長より高いものはなに一つ生えてはいない、一面の草原。

清澄寺の深山の風景もたしかによかつた、毎日毎日自分より大きなものを見ていると、時とすると自分自身が大きな樹肌をゆるやかにのはつてゆく蟻の如く小さく思える時すらあつた。ところが今この武蔵野の中に身を置く時、自分よりは大きなものは何一つ見えない。始めて今この果てしない大草原に佇立して、偉大な自己をみつげ出したような心持がするのだ。経文はすべて釈迦の説かれたものということは、何人も否定はしない、しかるにその經典を朝夕に誦誦する僧達か、何故釈迦を崇めずして阿弥陀仏を礼拝し大日如来を供養するのか、これ疑問の一つ、またそ

の釈迦といえども、經文を説かれたが故に、仏になつたのではなく、仏になつたが故に人々を教化し利益するがために經文を説かれたのであらう。釈迦の言々何々が經文になつたが故に、經文は八万といわれ六万巻といわれてもあえて不思議とはしない。しかし仏が仏になられた教がある筈である。釈迦が仏になられた法がある筈である。この法は八万や六万ある筈がない。釈迦が釈迦となられた法や教は一つしかない筈である。人の本心に二つある訳がなく、家に二人の主人がないのと同様仏の心も一つしかないのが、ものの道理である。釈迦が自分の心をとかれた経が必ずなければならぬ。しからばその經文は果して如何なる經文であらうか、これも疑問の一つである。これらの疑問を清澄寺の先輩である淨頭房や義淨房に問うたことがあつた。

「何故俱舍宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、真言宗、天台宗近くは禪宗、淨土宗などと言う宗旨が沢山あるのでしょうか」

「それはなあ、經文が沢山あるが故に八宗九宗とある訳よ」こともなげに答えた。

蓮長法師はその答えから自分の疑問が生れておるので、すかさずに、

「經文が沢山あるが故に宗旨がわかれたとはいわれるが、その經文は誰が説かれたか、この世に出現して經文を説かれた方は釈迦一仏のみである。しからば諸宗の説く所は一仏の所説のみ、その一仏を忘れて諸宗を崇める理由は何か、ましてこの釈迦一仏を却つてひくしとして他仏をたかしとする宗旨すらございます。これ不思議の一つ、又諸宗の諸仏は如何なる法を修行して仏にな

られたか」

と問うた時二人の先輩は顔を見合わして答えなかった。

「今にわかる、今にわかる。仏道修行のむずかしさはそこじゃ蓮長」

こういわれたのは師匠の道善御房であった。しかしその答えは励ましの言葉になっても解決は出てこない。

この研究心に富んだ蓮長法師のききたく思ったのは、当時の都鎌倉に今流行中の新しい仏教である念仏と禪宗の極理であった。

この極理をきわめたならば、日頃の疑問が解決するかもわからない。こう思いたった時、数年間育った干光山清澄寺のさしも広い境内も、小さな鳥籠のように思えてきた。この鳥籠を破って翼を張る荒鷲の如く武蔵野をゆくのが蓮長法師の今の姿である。めざすは無論鎌倉の都、草を踏み草を越えて行く、偉風堂々の蓮長法師、思はず、はたと足をとどめた。

春霞がいつの間に晴れたか、茫々たる武蔵野の果てに、一連の屏風の如く箱根秩父の連山がある。

しかもその山々を遥かにみおろして大いなる富士がそりたっている。この雄々せまらざる富士を望んだ時、果てしなく続いて大地の広大さをも誇るが如き武蔵野も、単なる一草原にすぎなかった。

そこをゆく自己も草原の一風物となりはてて、
旅ゆく一介の僧の如くに思えた。